柿原政一郎

――社会正義と郷土愛から来る奉仕の生き方――

石川正樹

はじめに

柿原政一郎は、高鍋町の政治と文化に最も貢献した人物です。戦前・戦後を通じて高鍋町長を三期勤めました。終戦後の困難な時代に、前任町長の懇請を受けて町長に就任しました。昭和十年には宮崎市長を勤めました。さらにその前には衆議院議員でした。

明治三十九年に東京帝大を終えると、岡山孤児院を開いた石井十次のもとでその秘書役を勤めました。併せて石井十次の最大の支援者だった倉敷紡績社長・大原孫三郎の秘書役も勤めました。

石井十次の近くで過ごした若き日の体験がその後の彼の人生を形成したといえるでしょう。大原孫三郎の秘書として働き、大原社会問題研究所の設立に骨を折ったことも、社会正義を実現する社会事業家としての感覚を磨くのに役立ったことでしょう。

父・正一（まさかず）、母・喜美（きみ）のひとり息子として誕生したときから、両親の深い愛情のもとで育てられました。両親は貧しかったのですが、父親は大志を持ち、原野の開拓という壮大な事業に挑戦していました。幼少期の成長に最も影響を与えたのが父・正一だったといえるでしょう。

正一は裸一貫から新田村（現新富町）湯風呂の原野を開拓し、当時としては最も進んだ開拓農村の創設に挑み、その目的を達成しました。

政一郎はいつもそんな父親の背中を見て育ちました。

まずは父・柿原正一の生涯から見てみましょう。

第一章　父・柿原正一の生涯

一、正一の生い立ち

正一は元治元年（一八六四）高鍋村道具小路の鷹匠（たかじょう）の家に生まれました。柿原家は禄高十石という小身の徒士（かち）でした。江戸



柿原正一　すぐれた農業開拓者 政一郎の父親

時代末期になると鷹匠の仕事はなくなりました。正一の父・正幸（まさゆき）は武芸にすぐれていたので、藩から抜擢され洋式訓練を受けるため二度江戸に上りました。廃藩置県後、明治五年から十年まで島田小学校に体操教師として勤めたといいます。

明治十年、西南戦争が起ると、高鍋は西郷軍について参戦するか否かで町を二分する論争が起りました。結局参戦することになり、洋式教練の教師であった正幸は、第七番隊の嚮導（きょうどう）（曹長の位）として出陣し、田原坂で戦死してしまいました。

正一の母・ときは二十八才の若さですでに亡くなっていました。正一は両親を亡くしてしまったのです。柿原家には、祖父・豊蔵と祖母・けさ、それに病身の叔父・吉彦、十四才の正一、正一の七才年下の弟・正次が残されました。

正一は後年、日誌に「祖父豊蔵氏強健にて農耕に勤めらるる外は老幼者のみにて、親類三浦興風氏の助力を得て漸く一家の生活を立つ」と、当時の柿原家の窮状を記録しています。

二、正一、小学校の代用教員をしながら晩翠学舎（ばんすいがくしゃ）に通う

柿原正一略年譜によると、正一は明治四年（一八七一）数え歳八才のときに松岡惣次郎方で手習いをはじめたとあります。明治六年に十才で島田小学校に入学します。翌年、十一才になったとき、母・ときが病死します。明治十年、十四才で西南戦争が起り、父・正幸が戦死します。翌明治十一年、島田小学校を十五才で卒業すると、小学校に代用教員で雇ってもらいました。その年十月、私塾・晩翠学舎に入塾します。

一才年下の石井十次も晩翠学舎にやってきました。二人は机をならべて学んだという記録が残されています。

晩翠学舎は藩校明倫堂が閉校になってのち、中等教育の場がないことを憂慮した旧藩士・田村義勝（たむらよしかつ）が開いた私塾で、漢学を教えました。四書五経を素読から学んだことが正一と十次の精神的成長に大きく役立ちました。高鍋出身の先輩で、後に大津事件の検事総長として有名になる東京在住の三好退蔵宅で書生をひとり雇いたいとの希望があり、晩翠学舎の生徒の中から正一が選ばれました。しかし正一がいないと柿原家が困るので家族から反対され、正一は無念の思いで断念しました。

三、正一に大志あり

柿原家は貧しく、正一は上の学校に行けませんでしたが、大志を抱いていました。原野の開拓です。新田村湯風呂（ゆぶろ）の国有地の払下げを受け、同志と共に開墾を行いました。初期には自給自足が困難だったため、正一は県庁に勤めながら開墾に従事しました。長男・政一郎が成長し学資

が必要になると、大阪区役所に就職し、後には住友に勤めました。政一郎が大学を終えると勤めを辞め、湯風呂に帰って開拓に従事しました。

彼は農民であると同時に能吏でもありました。金銭にも明るく常に収支を計算しました。彼がめざしたのは新しい農業でした。

四、正一、若くして結婚へ

柿原家は、家に女手（おんなて）がなくて困るというので正一は十七才で妻をもらいました。妻は西南戦争で戦死した田中増衛（たなかますえ）の長女・喜美です。石井十次のいとこでした。喜美は柿原家のような貧乏世帯に行くのを嫌がりましたが、「三日でよいから」と説得されて嫁に来ました。三日経ったので風呂敷包に荷物をまとめて実家に帰ると、「本当に帰る奴があるか」と叱られ、しかたなくまた婚家に戻りました。

後年、喜美はこの話をして家族を笑わせました。そんな喜美を柿原家では「こんな貧乏世帯によく来てくれた」と大事にしました。



柿原正一と妻・喜美　金婚式の写真

五、長男・政一郎誕生す

妻をもらった正一は将来の計画を立てました。原野を開拓し新しい農業を興すことが夢でした。明治十六年に長男・政一郎が生まれました。正一は理想を持ち、貧しいながらも生活基盤をつくり、政一郎に教育を受けさせたいと思いました。正一は宮崎県庁の最下級の職員「雇（やとい）」として就職しました。

県庁で大蔵省から出向していた中山尚之介（なかやましょうのすけ）を知りました。中山は博学多才でしたが親切な人柄でした。正一は中山から多くのことを学びました。中山も無学な正一が並々ならぬ才能を秘めているのを見抜きました。正一は中山に大阪に出て法律を勉強したいと打ち明けました。中山は大阪府庁に転任するよう骨を折ってくれました。明治十九年、正一は大阪府租税課に就職し、妻子を大阪に呼びました。

翌年、喜美の弟・田中正善（たなかまさよし）が、いとこの十次の岡山孤児院を手伝うこととなり、喜美は政一郎を連れ正善に同行して岡山に行きました。子供だった政一郎は、はじめて十次に会いました。この出会いは政一郎の将来に大きな影響を与えました。

正一は関西法律学校夜間部に入学しますが、府庁の仕事は多忙で勉強は進みませんでした。政一郎は入学した堂島の小学校で田舎者扱いされて通学をいやがり、金を持ち出して買い食いをするようになりました。

政一郎には大阪の生活が合わないのを知り、正一は宮崎に帰ることにしました。その前に上京し、中山尚之介に会って今後の相談をしました。鹿児島出身の農商務省次官前田正名（まえだまさな）にも面会して、進んだ農業政策について教えを受けました。彼の計画は固まっていきました。宮崎に帰ると、また宮崎県庁に就職し、給料をもらいながら農業をしました。

六、正一、開墾地を新田村湯風呂に決める

正一は県庁に勤めながら計画に着手しました。土地を物色したところ、新田村湯風呂の官有地の原野が気に入りました。自宅から一里半ありましたが歩いて通えました。雑木の山や谷のある起伏の多い台地で、湧き水もありました。原（はる）とよばれるなだらかな台地ではなく、開墾しにくい土地でしたが選んだ理由はリスク分散でした。原は開墾しやすいが干ばつや台風の被害を受けやすいのです。山や谷の起伏があれば、開墾はやっかいだが干ばつや台風被害は軽くてすみます。払下げ対価を支払うためには給料では足りず、牛を繁殖させ子牛を売って資金を貯め、二年かかって支払いました。道具小路の自宅を解体して湯風呂に運びました。

七、勤務しながら開墾事業

明治二十五年五月、払下げの許可が下り開墾事業を開始しました。土地は自分の所有となりましたが、一人で開墾するには広すぎるので、同志となる農民を募って入植させ、協力して開墾することにしました。

正一が考えた新しい農業とは次のようなものです。

まず、土地は正一が所有します。開墾は入植者（協力者）と一緒に行います。入植者には土地を貸し与えて開墾させます。入植者の土地から得られた収穫のうちから一定量を上納させます。三年たつと開墾した土地は入植者に無償で与えます。入植者を徐々に増やし、開墾地も徐々に増やしていきます。

入植者の第一号として財津徳次郎（ざいつとくじろう）、続いて片山嘉藤太（かたやまかとうた）が家族をつれて入りました。いずれも四国から開拓農家を目指して日向国に来た人たちでした。彼等ははじめは生活困窮者でしたが、困窮者であるが故に、与えられた土地を必死で開墾しました。

正一は湯風呂には四国出身者しか入れませんでした。正一は、自分が日向人でありながら、日向人の「てげてげさ（中途半端なこと）」を知っていました。四国人は日向人にない勤勉さと忍耐強さがありました。四国は土地が狭いので、集約農業が発達しました。農地を無駄なく耕作し、農閑期を設けませんでした。長男しか家督が継げず、次男以下は他

所へ働きに出なければなりませんでした。彼等には忍耐強さと勤勉さが身についていました。正一はのちには十次と相談し四人の孤児院出身者を入れました。

自給自足を目指しましたが、はじめのうちは米や野菜の収穫も十分でなく、自給自足には至らず、生活費が足りませんでした。正一は県庁勤めの給料を割いて入植者に賃金として支払いました。米だけでは現金収入が足りないので、換金作物の栽培もしました。

多忙で貧しかったのですが、正一は費用を捻出して四国や紀州まで出張し、専門の柑橘農家をたずねて果樹栽培の指導を受けました。みかん、ぶどう、柿などを植え椎茸栽培もして、現金収入を少しでも増やそうとしました。

正一は入植者の面倒をよく見ました。自立できない者には生活費を支給して支えました。借金をこしらえた者には、本人に黙って肩代わりしました。急に借金取りが来なくなったのを不思議に思った本人が調べると真相がわかりました。年末に各家をまわって餅を配るのは妻・喜美の役目でした。

そんな正一に入植者たちはよく従いました。彼等は懸命に湯風呂を開墾し、耕地を広げていきました。湯風呂は段々と豊かな耕地に変化していきました。

八、政一郎の学費稼ぎに住友に勤める

明治三十二年、政一郎の宮崎中学卒業が近づくと、学費が必要になりました。少しでも給料の多い職を求めて上阪し、大阪西区役所に勤めました。湯風呂の管理は財津と片山に任せました。

その年十一月、住友の鈴木馬左也（すずきまさや）に会います。鈴木馬左也は高鍋出身で、東京帝大を出ると内務省に入りました。内務省から愛媛県に出向していた明治二十九年に住友家からスカウトされます。鈴木は内務省を辞め住友に入社しました。入社と同時に住友本店の副支配人となり、明治三十七年には住友総理事となります。

正一が会った時、鈴木馬左也は別子鉱業所支配人を兼務していました。鈴木に頼んで住友に雇ってもらうことにし、別子鉱業所のある新居浜市に引っ越しました。鈴木の指示で岡山孤児院への四国一円の寄付金集めの世話役も兼任しました。住友は正一が能吏であることを認め、当時としては高給の月給二十五円で処遇しました。ちなみに大阪西区役所の月給は十七円でした。

九、政一郎が大学を終え倉敷紡績に就職、正一は住友を退社し湯風呂に帰る

政一郎は岡山の六高に合格しました。政一郎は六高に通いながら十次

の岡山孤児院の経営を手伝いました。明治四十年、政一郎は東京帝大を終えると、石井十次の岡山孤児院で働きました。同時に大原孫三郎が社長を勤める倉敷紡績株式会社に入社し、大原の秘書になりました。

正一は政一郎への学資の仕送りが不要になったので、高給の住友を未練もなく退社し、湯風呂に帰りました。正一は干ばつに備え溜池を作りました。溜池の建設に住友勤務で貯金した七百円をあてました。

そのころ湯風呂の開拓は成功事例として宮崎県の注目するところとなり、宮崎県知事高岡直吉が視察に訪れました。二月には石井十次夫妻もやってきました。六月には溜池が完成し、石井万吉、岩村真鉄らを招いて完成祝いをしました。

明治四十二年八月、住友は農業分野で社会事業を興す計画を立て、柿原正一を主任で迎えたい旨要請してきました。正一はこの社会事業に興味を示し、再び住友社員となりました。この時の月給は五十円でした。しかし、この事業は成功せず、正一は翌年七月住友を退社し、湯風呂に帰りました。

十三、政一郎、宮崎市長となり、昭和天皇を案内する

昭和十年二月、宮崎市役所では職員の集団的な税金使い込み事件が発覚し、市長、助役、収入役が引責辞任する非常事態となりました。

秋には都城市で昭和天皇が臨席して陸軍大演習が挙行されます。天皇は帰途にお召列車で宮崎市を訪問することになっていました。天皇の行幸があるのに市長なしでは済まされません。

緊急市議会は後任市長に柿原政一郎を選出し、内諾を得るために柿原の親友・岩切章太郎を特使として派遣しました。

政一郎はこのとき五十二才でした。政一郎は「無報酬の名誉市長」を条件に内諾します。七月十一日に市議会は満場一致で正式に柿原政一郎を市長に選任しました。政一郎は議場で就任演説を行いました。

「私は行政については全くの素人であるが、宮崎市が火事だと聞いて、バケツをひっさげて駆けつけました。一意献身の覚悟でございますので、なにとぞ皆さんのご協力をお願いしたい」

議場は割れるような拍手で応えました。

十一月十五日、政一郎は宮崎県庁の屋上に昭和天皇を迎え、宮崎市内



県庁屋上で昭和天皇に説明する柿原誠一郎（後ろ姿）

を天皇に説明するという栄誉に浴しました。父・正一は政一郎の、この栄誉を心から喜び、終生誇りとしました。政一郎が昭和十二年に市長を退職するまでの二年間は、正一にとっては市長の父親として、晴れがましく、幸せな日々でした。

正一の昭和十年十一月十五日の日誌には次のように記録しています。

「十一月十五日　（天皇陛下）宮崎御出発、鹿児島より御乗艦、御帰京遊ばされ、政一郎は鹿児島へ御見送り申し上げたり、柿原家は旧藩にて十石を頂戴する徒士（かち）にて鷹を預かる家柄なり、政一郎に至り、初めて天皇陛下に咫尺（しせき）し奉りたる光栄此の上無し」

十五、正一、脳出血で倒れ、七十三年の生涯を終える

昭和十二年九月、正一は妻と二人で三納代駅から歩いて湯風呂に帰る途中で四、五回ころびました。通りかかった地元の青年にリヤカーに乗せてもらって家に帰りつきました。脳出血でした。十日後には昏睡状態に陥りました。政一郎の懸命な看病もむなしく、十月十一日に正一は自宅で永眠しました。享年七十三才。

湯風呂の農民たちは尊敬するリーダーの死を心から悼みました。彼等は松の木を切って柩（ひつぎ）を作り、松やにを内面に塗り、茶の葉をぎっしりと敷きつめ、その上に遺体を安置しました。重さ三百キロもある柩を白装束の若者たちが担ぎ、湯風呂で一番高い山の上に埋葬しました。

正一は、こよなく愛した湯風呂の地で永遠の眠りにつきました。

第二章　柿原政一郎の生涯

一、政一郎の生い立ち

柿原正一・喜美の一人息子として、高鍋村道具小路に明治十六年（一八八三）五月二十五日に誕生しました。父・正一は十七才、母・喜美は十八才でした。

明治二十年暮、当時大阪府庁に勤務していた正一は、喜美と政一郎を大阪に呼び寄せました。政一郎は大阪市堂島渡辺橋北詰小学校に入学。後に堺小学校に移ります。明治二十二年、正一は大阪府庁を辞めて高鍋に帰りました。



若き日の柿原政一郎

明治二十八年四月、政一郎は公立高鍋学校に入学します。高鍋学校は、旧高鍋藩の田村義勝が私塾・晩翠学舎に一年遅れて興した中等学校で、藩校明倫堂の学風を受け継ぐ青少年教育の学校でした。明治十八年には晩翠学舎を吸収します。近隣から優秀な若者が集まりました。

明治三十一年、政一郎は宮崎市の県立宮崎中学校四年生に編入試験を受けて入学しました。明治三十三年三月卒業。岡山市の第六高等学校工科の入学試験を受けますが不合格となりました。翌年一月、石井十次を頼って岡山に行き、受験勉強に精を出します。この間に石井十次の感化を受け、工科志望を哲学に変え、七月に六高を受験し合格しました。

明治三十七年九月、東京帝大文科大学哲学科に入学しました。宗教哲学を専攻し、印度哲学に興味を持ちます。同時にキリスト教にも関心を持ち、本郷教会の海老名弾正牧師の感化を受けました。宮崎県出身の信者と「日向道交会」を興し、若山牧水、安田尚義等と親交を深めました。後に妻となる福崎マサもメンバーでした。大学一年生のときから脚気を病んだのがもとで体が弱り、肋膜炎を併発。三年生の夏休みに赤痢に感染し健康を損じました。ついに学業を捨て静養に専念することを決意し、明治三十九年十月に大学を中退しました。しかし肋膜炎と大学中退のことは両親には知らせませんでした。心配をかけまいとの孝行心からでした。明治四十年五月にうけた徴兵検査は病み上がりのため不合格でした。

二、政一郎、石井十次の助言で大原孫三郎の秘書となる

健康が回復すると、政一郎は石井十次に身の振り方を相談しました。十次は、大原孫三郎の倉敷紡績に入社し、孫三郎社長の秘書を勤めるよう助言しました。明治四十年六月、満二十四才になった政一郎は、孫三郎に面会し、正式に倉敷紡績に入社し、社会人の第一歩を踏み出しました。

政一郎は大原孫三郎の秘書であると同時に十次の秘書役もつとめました。

明治四十二年四月、十次は郷土高鍋出身の友人・鈴木定直（当時大阪府警部長）から、大阪スラム街の救済が急務であることを聞きました。十次はスラム街に人類愛の灯を点じたいと念願し、政一郎にスラム街の調査を命じました。十次は政一郎の案内でスラム街を見て廻り、愛染橋近くに夜間学校と託児所の開設を決めました。政一郎は、十次と相談し、かつてペストが日本に流行した時、ペストの発生場所であったという下駄工場跡を安く借り受けることにしました。政一郎は南京虫に悩まされながら、下駄工場跡に泊まり込み、施設の開設のために突貫工事を行いました。そんなところに寝泊りする政一郎を、警察は「アカにちがいない」と内偵をはじめました。十次の福祉事業は、まったく理解されない時代でした。

愛染園と名付けた夜間学校・託児所は学校に通えない子供たちや、働く母親たちから大歓迎を受けました。

大原は十次の事業を見て、社会問題を科学的に探究する機関が必要であることを痛感し、大正八年に大原社会問題研究所を設立しました。評議員になった政一郎は大原と共に人事に奔走し、所長に東大教授の高野岩三郎、評議員に川上肇、長谷川如是閑、大内兵衛、森戸辰雄、笠信太郎など一流の専門家を選びました。大原社会問題研究所は社会問題研究のシンクタンクとして日本有数の存在となりました。

三、政一郎、結婚す

明治四十三年十二月、政一郎は福崎マサと結婚しました。大原孫三郎夫妻媒酌のもと、岡山市の教会で婚儀をあげました。新婦マサは、高鍋町の旧藩医福崎家の娘で、宮崎県立宮崎高等女学校第一期生で、首席卒業の才媛でした。政一郎とは同年生まれの満二十七才（明治十六年八月生）で相思相愛といわれました。式には石井十次夫妻をはじめ、親族知己多数が出席して祝福しました。二人は高鍋町洗町の藤田正次宅を借家として住みました。



石井十次、大原孫三郎の秘書として働いていた頃の写真

四、石井十次の理想による日向土地株式会社を設立

日向土地会社は、今日の不動産会社とは異なるものでした。当時の農村不況により小地主の自作農が高利負債のため土地所有権を失い、小作農に転落するのを如何にして食い止めるか、を考えて設立されたものです。石井十次の農村救済のテスト機関でした。高利負債をかかえた自作農に、低金利で資金を貸し付けて自作農を救済する試みでした。会社の資本金は二十万円で、事務所は小丸小路に開設し、政一郎が代表取締役常務となりました。困窮する自作農にとって干天の慈雨のような低利融資で、申し込みが殺到し、事業は軌道に乗りました。しかし、一年九ケ月後の大正三年一月に推進役の石井十次が死去したので、事業は惜しくも閉鎖のやむなきに至りました。会社は整理手続きに入り、会社の財産は大正八年に大原孫三郎により設立された財団法人済美財団に吸収されました。

五、石井十次の召天を見送る

大正三年一月三十日、石井十次は茶臼原で召天しました。享年四十九才でした。政一郎が十次の臨終に立ち会ったという記録はなく、政一郎

も自ら立ち会ったと述べてはいません。しかし政一郎は尊敬して止まない十次の臨終に立ち合い、十次の召天を見送ったにちがいないと推定されます。政一郎は十次の危篤のころから身近に居て容態を見守ったと考えられます。そして十次と親しかった人々に容態を知らせる役目を担いました。


石井十次

生涯にわたって十次を支援した堤長発（つつみながあき）は、当時宮崎農工銀行頭取の職にありました。一月六日、堤は十次が宿痾（しゅくあ）の腎臓病のため危篤であるとの電話を高鍋にいた柿原政一郎から受けました。電報で見舞の言葉をのべ、見舞に行く人に託して見舞品を送りました。三十日、宿痾にわかに改まるとの電話が来て、見舞の電報を送りましたが、程なく永眠の報がきました。直ちに弔電を発し、二月四日の葬儀に参列しました。（泥谷良次郎著「堤長發君小傳」）

一月三十一日、当時宮崎県知事であった有吉忠一（ありよしちゅういち）は茶臼原を訪れ、十次の遺骸に恭しく告別しました。

「永い間、一方ならぬご苦労をなされ、天下人民のためにお尽くし下された段感謝にたえません。謹（つつし）んで県民一同に代わってお礼申します」と述べました。まるで生きている人に別れるような鄭重さであったといいます。有吉知事はその夜妻町に一泊したので、代表者（柿原政一郎と推定されます）が訪問してお礼を述べました。代表者に対して、有吉知事は次のように述べました。

「石井君一代の功業は、陛下の赤子中実に数少い活模範（いきもはん）であるから、今病中の氏に御手許から金子十万円程の御下賜金を願ひ、一（ひとつ）は現在の負債を償却し、将来の事も安心して終（おわり）を完（まっと）うせしめ下され度く、上京陳情して見たが、事志（こころざし）と違ひ、甚だ残念である」

有吉知事は上京して宮内庁に、天皇陛下から十次に十万円を下賜金として与えて下さるよう陳情したが、その望みはかなえられなかったといいます。有吉知事の人間味がわかるエピソードですが、この話が政一郎からしか公表されていないのは、有吉知事が伝えたのは政一郎に外ならなかったからだと考えられます。

六、政一郎、孤児院の清算人となる

政一郎は石井十次の死去を倉敷の大原孫三郎と林源十郎に電報でしらせました。二人は高鍋に急行しました。大原は茶臼原に到着すると、提げて来た鞄を出してこう告げました。

「現金を用意してきました。これで一度一切の借金を支払ってください。

但し石井君の名誉のために利息を値切らずに、元利金全額を完済してください」

孤児院については臨時評議員会で「岡山孤児院の事業は石井十次の人格をもってして初めて可能であった。この尊い事業は石井十次一代の事業とすべきで、できるだけ速やかに整理すべきである」ことが決まりました。

大原孫三郎を後任院長に選任しました。大原は極めて多忙な実業家でしたが、約五年間を、年に数回茶臼原に通って職員や孤児の面倒を見ました。孤児院への寄付金は激減しました。孤児院の経費は大原が負担しました。

大原が倉敷紡績社長として多忙を極め、孤児院長との両立が困難になると、孤児院出身者で大原の支援をうけて事業を経営していた大庭猛（おおばたけし）が大正八年に後任院長を継ぎました。しかし大正九年の経済恐慌で打撃を受けて辞任します。

大庭の後任の院長に石井未亡人辰子が就任しました。幹部の小野田鉄彌、百田孟一が辰子を支えました。社会情勢の変遷から、入院する孤児の数は減少し、職員も減少しました。

大正十五年、評議員会は財団法人岡山孤児院を解散して清算に移しました。石井辰子、柿原政一郎が清算人となり、孤児院出身者でいったん社会に出たが社会になじめず、また落伍者となって孤児院に帰って来た者たちの面倒をみました。

昭和二年三月、石井辰子は六十五才でその奮闘の生涯を茶臼原で終わり、十次のかたわらに葬られました。

大正十年には大原社会問題研究所でまとめられた「児童保護研究」に児童保護法の制定が提案されました。政府もようやく腰をあげ、児童保護法を制定するという時代になったのです。

しかし世間には岡山孤児院を形だけ真似た施設が多発していました。彼等は孤児達に哀れな格好をさせて家庭を廻らせ寄付を強要させました。中には、岡山孤児院をまねて「岡山の孤児院」と称する輩（やから）も出てきました。生前の十次はそれを知って愕然とし、「岡山孤児院では寄付金募集をしない」という宣言をしました。

大正十五年の岡山孤児院解散の決議に対して、そのような似非（えせ）孤児院の経営者から猛烈な反対論が出ました。いずれも岡山孤児院の真面目な経営の実態を知らず、類似の似非孤児院の経営者から出た利己主義的な議論が多かったのです。しかし、それが契機となって社会的な議論も起りました。全国社会事業協会から猛烈な反対論が出て、中には不敬論を以てとっちめようとする手合いもありました。折角多年にわたり皇室から保護をうけながら、解散するとは不敬であるというものです。

大原孫三郎と柿原政一郎は評議員会を代表して、宮内省と内務省に出頭して挨拶しました。そのあとふたりは社会局長官長岡隆一郎と会談し、岡山孤児院解散の説明をしました。長岡長官は解散に反対論を述べました。しかし国が費用を負担してやるから解散してはいけない、とはいいませんでした。両者は議論すること半日に及びましたが結論に達せず、長岡長官は「（孤児院解散には反対であるが）孤児院継続を命ずる法律がないから解散も止むを得ない」と言い放って席を立ち、会談は終わりました。

帰路、大原は政一郎に向かって「石井君生存ならば（解散を）さぞかし喜んでくれるだろう」と述べたといいます。

七、政一郎、新聞人となる

大正三年八月、政一郎は大原孫三郎の招きにより、家族同伴で岡山市に移り、日刊新聞「中国民報社」に入社しました。政一郎の言論人としての思考力と筆力が磨かれる機会が与えられたのです。

中国民報は明治二十五年設立の政府機関紙でしたが、大正二年から大原家が経営に参画しました。不偏不党・厳正中立を標榜した中国地方の有力紙でした。

政一郎は大正六年に支配人となりました。四国にも勢力を伸ばし、讃岐日報社を買収し、姉妹紙「四国民報」を発刊しました。

大正十三年に大原家は経営から手を引き、政一郎が個人経営を引き受けました。昭和五年に株式会社に編成替えを行い、昭和八年に山陽新報と合併しました。社長の柿原は合併後は平取締役として経営から身を引きました。現在は「山陽新聞社」に再編され、代表的地方紙となっています。

八、大原社会問題研究所の設立に奔走する

政一郎が中国民報社に入社して間もない大正五年十一月、大原孫三郎は石井十次が大阪市にのこした愛染橋の諸事業を組織的に改革しようとしていました。大正七年一月、彼は財団法人石井記念愛染園を創立し、その一部門として社会救済事業の研究室を設けました。政一郎は評議員として招かれ、運営の一端をになうことになりました。

大正七年八月には社会不安が起り、各地に米騒動がもちあがりました。高利貸、大地主、富豪が焼き打ちにあい、遂に軍隊が出動しました。

大原孫三郎は、社会的責任感から危機対策の必要性を痛感しました。十次であればどんな行動を起こすだろうかと考え、彼は政一郎を招き議論を重ねました。

その結果「社会救済においては、個々の貧民、孤児の応急救済策は対

症療法に過ぎず、病根の完治に至らない。社会的病根を産む原因を科学的に探究する組織的な研究機関が必要である」との結論を得るに至りました。

そこで、愛染園内に敷設した社会救済研究室を拡充し、独立させて「大原社会問題研究所」を設立する構想を固めました。

運営費は大原家が負担することにしましたが、組織と人事を如何にするかが問題でした。政一郎が主任となって人材集めに動くことになりました。多忙な中国民報社の経営をしながら、社会問題研究所の首脳人事に東奔西走しました。

政一郎は大原とともに、国民新聞社長の徳富蘇峰を訪ね、また京大教授の川上肇を訪問して意見を聞きました。結局、東大教授高野岩三郎、京大教授河田嗣郎、京大講師米田庄太郎の三名を経営者に招くこととし、本人の説得に当たりました。三名とも大学に在籍のままで研究所の運営委員を引き受けました。

大正九年三月には高野岩三郎が東大を去って研究所長に専任することになりました。研究員には、長谷川如是閑、笠信太郎、川上肇、森戸辰雄、大内兵衛など当代一流の専門家が加わり、当時のシンクタンクとしては日本のみならず、世界的にも著名な存在となりました。

政一郎は大正十二年に監事となり、十四年間その任にありましたが、昭和十一年研究所の東京移転を前に退任しました。昭和十八年に大原孫三郎が死去。また昭和二十四年に所長の高野岩三郎が死去すると、研究所は法政大学と合併し「法政大学大原社会問題研究所」と称しました。現在は「財団法人法政大学社会問題研究所」として存続しています。

九、政一郎、伯備鉄道の敷設に貢献

大正七年秋、政一郎は大原孫三郎の特命を受けて、国鉄伯備線の開通にあたり、伯備線を山陽線岡山駅を起点とし、倉敷を分岐点として、山陰線米子駅に至るというルートの設定に奔走しました。時の内務大臣兼国鉄総裁床次竹二郎に面談し、粘り強く交渉した結果、予定したルートの実現を見ました。沿線の住民たちは、政一郎の政治力に感謝して「伯備線は柿原鉄道だ」と称賛しました。伯備線は岡山、倉敷と山陰をつなぐ輸送手段として現在も重用されています。

十、政一郎、衆議院議員に当選するも一期で退く

大正九年五月、三十七才になった政一郎は衆議院議員選挙に政友会公認候補として宮崎一区から立候補して当選しました。しかし議員になってみると、政友会の空気は閉鎖的で、当選回数による階級制が幅をきかせており、一年生議員の発言は採用されませんでした。政一郎は長居す

る場所でないことを悟り一期四年で衆議院議員を退き、再び立候補することはありませんでした。

十一、政一郎、田中家から広島市宇品地区の開発を委託される

広島市の素封家・田中家は宇品地区の臨界地帯に約五十万坪（約一六五万平方メートル）の広大な農地と原野を所有していました。そこには多数の小作人がいました。大正中期に至り、大正デモクラシーの風潮を受けて小作争議が多発し、収拾がつかなくなりました。手を焼いた田中家はかねてから知り合いの政一郎に相談しました。

大正十一年三月、田中家は意を決し、これら農地原野五十万坪の経営管理を政一郎に一括して委託したい旨申し入れました。

このころ政一郎は衆議院議員であり、中国民報社や大原社会問題研究所にも関係を持ち、また高鍋製糸会社の社長でもあり、多忙極まる生活でしたが、田中家のたっての申し入れでもあり、引き受けることにしました。

事業の方法については熟慮を重ねました。その結果、時代の流れを勘案し、「農耕的土地利用」ではなく、「都市的土地利用」に転換するのが時代の趨勢に合うのではないかと考えました。宇品港を中心とした理想都市の建設が広島市の発展に役立つとともに、市民の生活基盤としてのまちづくりにつながるにちがいないと考えました。政一郎のデベロッパーとしての能力が発揮されたアイデアでした。

事業に透明性と公平性をもたせるため、「広島臨港土地株式会社」を設立し、資本金を百万円としました。社長に田中家の嗣子田中喜四郎を据え、政一郎は社長を支える専務取締役に就任。しかし事業の全責任は政一郎が負いました。

土地開発に当たっては、土地で農業を営む小作農民を離農させなければなりません。これが難事でした。政一郎は自ら小作農民との交渉にあたりました。彼の情理を尽くした説得を農民たちは受け入れました。大正十五年には全小作地の引き上げが円満裡に完了しました。翌年正月から宅地造成が本格的にはじまりました。

土地開発には土木の専門家が必要です。主任技師に工学博士・楠宗道、支配人に中村藤太郎、庶務に長村祖八というすぐれた陣容を整えました。

政一郎は会社の経営に理想を貫き、「企業の道義」を推進しました。

「企業はその利益を社会に還元し、社会の欠陥や福祉の不足を補ってゆくべき責任を負わされている。従ってわが社は営利だけを目的とせず、社会に奉仕するために事業を遂行する」というのです。この精神は大原孫三郎の経営思想をうけついだものでした。

土地の分譲にあたっては、土地を購入する相手の購入目的を詳細に確

認し、土地を転売する可能性がある相手には売りませんでした。

公共の福祉に役立つことは、採算を度外視して臨みました。長さ二キロメートルに及ぶ広い電車通りの敷地を広島市に寄付しました。工場誘致のための市営運河の用地五ヘクタールを市に寄付しました。学校用地や寺院用地の寄付も行いました。造成地には、碁盤の目のように道路が通り、官公庁、会社、銀行、学校、病院が立ち並ぶ公共地区ができました。一般住宅や商店の地区もできました。十三年後の昭和十二年には宇品地区の人口は一万三千人に達しました。鉄道の駅が三つ、電車の停留所は五つでき、その後も発展をつづけています。

大正十年、田中家は宇品地区に私立広陵中学校を設立しました。政一郎は学校経営について助言役を引き受けました。昭和十三年には同校監事、昭和二十年には理事となります。同校が広陵高校になると終身理事となり、経営に参画しました。政一郎なきあとも同校と柿原家の関係は続いています。

十二、政一郎、広島で野口遵（のぐちしたがう）に出会い、宮崎に伴う

大正九年、政一郎は広島市で野口遵という人物に出会います。野口は石川県金沢市の生まれで、政一郎より十才年上でした。剛直気ままな性格でしたが、すぐれた技術者でした。彼はかねてから広島市の太田川の豊富な水資源と遠浅の海岸を造成して大規模な化学工場を興す野望を抱いていました。大正八年に広島市に来て各方面に折衝をはじめました。しかし野口のやり方が強引すぎて、漁民たちの強力な反対に遭い、彼の計画は挫折しました。失意の野口を政一郎は何とか救いたいと考えて、宮崎県に呼ぶことにしました。

当時政一郎は宮崎県選出の国会議員であり、宮崎県の電力事情にも精通していたので、野口と腹を割って話をしました。その結果、野口は政一郎を信頼し、宮崎県で事業を興すことを決断しました。政一郎の紹介で宮崎県庁を訪れた野口は、各方面を調査した結果、延岡市の五ヶ瀬川河口の土地を工場立地点に選びました。

大正十一年八月、当地に日本窒素・延岡工場を起工しました。これが現在の旭化成・延岡工場の誕生でした。野口は旭化成の初代社長に就任しました。

十三、政一郎、高鍋で「茶業」を開始する

昭和元年八月、十次なきあとの岡山孤児院が解散しました。政一郎は大原孫三郎と共に清算人となり、後見役を引き受けました。昭和六年、茶臼原には百田盃一が残り、「石井記念協会」を設立し、残留孤児を抱えて奮闘していました。茶臼原の桑園を県の指導で茶園に変え、努力の

すえ生産を軌道に乗せましたが販路の開拓ができず、赤字がかさみ苦境に瀕しました。彼は岡山に政一郎を訪ね、代って茶園を経営してくれるよう懇請しました。

政一郎は直ちに茶臼原に赴いて視察し、高鍋で茶園の経営に携わることを決断しました。翌年に生産工場を高鍋町萩原に建設し、「柿原茶舗」の看板を掲げました。海外進出も試み新しい釜炒り茶を開発しました。

戦後は商号を「九州茶業株式会社」（九茶）に改めます。政一郎にとって茶業経営は初めてでしたが、政一郎の努力と工夫の甲斐があって、茶業の経営は軌道に乗りました。

十四、政一郎、宮崎市長を辞め、県議となり、その後高鍋町長となる

昭和十二年、政一郎は宮崎県議会議員補欠選挙に市長在職のまま立候補し、当選すると市長を辞任し、県議となりました。県議となった理由は県内の電力行政を正し、宮崎県を電力不足から救うためでした。小丸川水系に県営発電所を建設し、農業用水の確保も目指しました。予算獲得にも成功し、川原発電所と石河内発電所の竣工を見ました。


高鍋町長時代の柿原政一朗

しかし戦時色が強くなると、発電事業は国の統制下におかれ、開発した電力を宮崎県のために活用するという初期の目的は果たせなくなりました。

昭和十三年、高鍋町議会は満場一致をもって町長に柿原政一郎を推挙しました。政一郎は県議在籍のまま「無報酬の名誉町長」を条件に引き受けました。町民が期待したのは、「高鍋町と上江村」の合併でした。この合併はそれまで歴代の町長が試みましたが、上江村の反発が激しく、成功しませんでした。合併は高鍋町にとって重要な懸案事項でした。

政一郎は「対等合併を原則とし、高鍋町と上江村を同時に廃し、新制高鍋町とする」方式を提案しました。高鍋町と上江村は政一郎の提案に賛同しました。その年のうちに新制高鍋町は発足しました。長年にわたる町民の悲願は政一郎によって達成されたのです。

その後、戦時色が濃くなり、行政には軍部が介入するようになりました。平和主義者であった政一郎は軍部の干渉をきらい、太平洋戦争の開戦前に一切の公職から退きました。この決断は終戦後に幸運をもたらすことになります。政一郎は公職追放令の対象にならず、戦後すぐに公職に復帰できたからです。

十五、政一郎、広島で原爆に遭う

昭和二十年八月六日、午前八時十五分、広島市宇品町の自宅で朝食を済ませた政一郎は、三・五キロはなれた地点に落下した原子爆弾に見舞われました。目を射る一瞬の閃光とともに自宅は半壊し、いあわせた五名が崩れた家の下敷きとなって気絶しました。しかし奇跡的に助かりました。政一郎夫妻も外傷はありませんでしたが、五名のうち二名が二ケ月のうちに死亡しました。

やがて八月十五日の終戦を迎えました。十二月に広島市復興促進会が発足し、政一郎は委員に選ばれました。広島戦災供養会も結成されました。政一郎は、「爆心地に後世に残る納骨堂と供養塔を建立し、世界に原爆の非人道性を伝えよう」と決心しました。しかし、進駐軍から原爆批判活動をしないよう釘を刺されていた広島市長は弱腰で、計画は進みませんでした。市民は結束し、広島戦災供養会を改組し、政一郎を理事長に選びました。政一郎はリーダーシップを発揮し、同志に呼びかけて市内を行進し、浄財を募りました。浄財は五十余万円に達しました。広島市はこの浄財を基金とし、半地下式鉄筋コンクリート造りの納骨堂を建設しました。政一郎は、匿名で樹齢百六十余年の杉の大木を供養塔として、納骨堂のかたわらに建立して寄進しました。

毎年八月六日の原爆記念日には供養行事が行われています。政一郎は昭和三十六年をもって病気のため理事長を退き、以後終身名誉会長となりました。

十六、児嶋虓一郎（こういちろう）に十次の遺志を継ぐよう奨める

十次の孫・児嶋虓一郎は東京帝国大学の東洋史学科を卒業後、昭和十四年に陸軍に入隊しノモンハン事件に従軍しましたが、奇跡的に生還しました。

昭和十九年再招集で岡山連隊に入隊後、奇しくも高鍋町に国土防衛部隊として駐屯し、米軍の本土上陸に備えていました。

翌二十年八月十五日、児嶋虓一郎は終戦を高鍋で迎えました。終戦が三ケ月遅れていたら、米軍の「オリンピック作戦」の発動で本土上陸が敢行され、鹿児島・宮崎の海岸は戦火で蹂躙（じゅうりん）されたに違いありません。とても生き残ることは出来なかったでしょう。

児嶋虓一郎は、石井十次生誕の地で生き残ったのでした。虓一郎には感じるところがあったに違いありません。

国土は焦土と化し、戦災孤児や浮浪児は巷（ちまた）にあふれていました。政一郎は虓一郎を幼少のころからよく知っていました。政一郎は虓一郎に、「こんな世情だから、石井十次先生が残された遺業を継ぐことこそが君の使命ではないか」と、十次の遺志を継ぐことを奨めました。

虓一郎は茶臼原に残って戦災犠牲者の救済に献身奉仕することを決意し、昭和二十年十月に石井記念友愛社を設立しました。政一郎は理事として友愛社を支えました。

十七、政一郎、財団法人正幸会を設立する

昭和二十二年、政一郎は財団法人正幸会（現・一般財団法人正幸会）を設立しました。正幸会とは、父・正一の遺志を継ぐために、遺産の大半を割いて資金とし、郷土の文化教育政策に貢献する目的で設立した財団法人です。田原坂で戦死した祖父・正幸の名前をとって「正幸会」と名付けました。政一郎は自ら筆をとり、設立趣意書を書きました。

「故柿原正一は高鍋藩士柿原正幸の長男として、維新の風雲急なるうちに生まれ、十四歳にして父を西南の変に失い、夙くより審さに辛酸をなむ。置県のはじめ、宮崎県雇いとなりてより、前半生を俸給に依食しつつ志を殖産興業に立て、児湯郡新田村湯風呂谷の官有地払い下げを出願し、明治二十五年これが許可を得るや僅少の家産と勤倹蓄財とを資本として茲に移住し、畜産に開墾に植林に、全らゆる難苦と戦い、独力経営四十五年、無人の曠野に戸数十五、耕地四十町、山林数十町を算する一農村の創作に成功し、七十四歳を以て昭和十二年十月十一日天寿を茲に終ゆ。初より克く入植の人々を愛撫指導して自作農育成の方針を実行し、余力を挙げて利用厚生と大衆文化の向上とに精進したり。殊に清観院公（七代藩主秋月種茂）以降高鍋藩学の遺風を景仰し、必ず微力を振学興風に致さむことを本願としたりき。今や再建日本の根基は、之を郷土文化の向上に求めらるるに当り、高鍋藩学明倫堂文庫復興の議あり。一方農地法の実施により、自作農育成の業正に其の完遂を見るに遭ふ。即ち故人の遺志を行わむが為に永逝満十年の日を期してその遺産を寄附し、明倫堂文庫復興を主眼とする財団法人を設立せむと欲す。会名に其の先考の名を冠するは、則ち故人の本懐之に過ぎざるべきを想へば也。

昭和二十二年十月十一日」

役員には、常務理事柿原幸二、理事児嶋虓一郎、理事竹本哲子が就任しました。

政一郎は父の背中に清観院公の明倫堂建学の精神「国づくりは人づくり」を見ていたのです。正幸会は図書館や近隣町村に地域文化振興のための寄付を続けています。

十八、政一郎、請われて再度高鍋町長となる

終戦後、高鍋町の財政は極度に悪化しました。昭和二十四年、町長の座についたばかりの宮越古寿は累積赤字を処理しかね、「この上は柿原

先輩に頼る以外に道なし」と政一郎に町長引受けを懇請して辞任しました。

政一郎は持ち前の郷土愛と奉仕の精神から引き受けることにし、翌年十二月の町長選に立候補し当選します。驚いたことに町の金庫は空で、国民健康保険の医療費も支払不能でした。政一郎は金融機関の支援をあおぎ、経費を徹底的に節減して財政の立て直しをはかります。昭和二十九年の町長改選には再び立候補し、圧倒的人気で再選されます。

十九、図書館を町に寄付

政一郎は高鍋町の文化向上を最重要課題と考えて、財政多端の折ではありましたが、昭和二十五年に図書館の建設を決断します。元営林署の土地建物を図書館用地として町に譲り受けます。隣接地を政一郎が自費で買い増して町に寄付しました。昭和二十九年には正幸会が出資して図書館建設に着手しました。高鍋農学校にあった明倫堂書庫を解体し、土蔵造りの書庫を建設。そこに明倫堂にあった古文書類を収蔵し、完工と同時に町に寄付しました。明倫堂文庫には約一万六千冊におよぶ古文書が収蔵されており、これらの古文書は、県内でも有数の歴史資料として知られています。

政一郎は町長在任のまま宮崎大学に通い、司書の資格を得て図書館長を兼務しました。正幸会は図書館建設に百十六万円を寄付しました。政



町立図書館の開館式


高鍋図書館に移築された
当時の明倫堂書庫（右）、毅堂書庫




令和４年３月に新装

一郎はこの年の町長年俸三十八万円を図書購入費として寄付しました。

令和四年四月、高鍋町は柿原政一郎を顕彰して、図書館を「柿原政一郎記念高鍋図書館」と命名しました。

二十、高鍋町営球場を建設

政一郎は戦後の混乱の中で青少年の健全な育成に心を砕きました。まだ貧しい町民の生活の中で、高校野球は町民が熱狂するスポーツでした。高鍋高校野球部を率いる平原美夫（ひらばるよしお）監督は、美術科の教師で優れた洋画家でしたが、画業よりも野球に情熱を注ぎました。政一郎は野球場を建設し、高鍋高校が自由に使えて町民も多く集まる場所にしたいと考え、町営球場建設を企画しましたが予算は全くありませんでした。政一郎は助役の尾崎一男（おざきかずお）と知恵を絞り、失業対策事業として人件費を獲得することを考えつきました。尾崎は高鍋出身で建設省にいた若手官僚・上条勝久（かみじょうかつひさ）（のちに参議院議員）の協力を得て労働省と交渉。失業対策事業として人件費六百万円を獲得。町からは事業費三百万円を捻出して、合計九百万円という低コストで球場を建設しました。昭和二十九年に高鍋高校は宮崎県ではじめて甲子園出場を果たし、高鍋町民は熱狂しました。昭和三十年に球場開き。その後、高鍋高校野球部は黄金時代を迎えます。



高鍋総合運動公園野球場（町営球場）



二十一、南九州化学工業設立準備中に、選挙違反嫌疑を受ける

昭和二十七年、町の発展のため南九州化学工業株式会社を設立しようとして準備中に選挙違反事件が起こりました。政一郎は前年秋の衆院選でトップ当選した相川勝六の選挙事務所長を勤めました。選挙違反の嫌疑がもちあがり、政一郎も嫌疑を受けます。政一郎は東京で南九州化学への銀行融資交渉中でした。新聞報道がなされ警察の捜索がなされましたが、政一郎は七十四日間も行方がわかりませんでした。その間、町政を支えたのは助役の尾崎一男でした。政一郎は十二月に突如姿を現し県警本部に出頭します。取調べの結果、嫌疑は晴れ無罪放免となりました。

拘置所から帰った政一郎は羽織袴(はおりはかま)姿で町長室に現れ、直ちに南九州化学工業株式会社の設立総会を開きました。吉田貞吉(よしださだよし)（高鍋町小丸出身。元住友化学工業株式会社社長）が社長に就任し、南九州化学の事業は軌道に乗りました。

二十二、石井十次伝を執筆する

昭和二十七年、政一郎は日向興業銀行創立二十周年記念事業として実施された日向文庫刊行において、請われて「石井十次伝」を執筆しました。当書の「跋(ばつ)にかえて」のなかで、次のように述べています。

「一度は石井評傳を私の角度からも物して見たいと、かねて考えていたから御引受はしたが、却(かえっ)て焦点が近すぎて、うまくピントが合わなかった。さぞお読みにくいことでしょう。私は石井十次の近親で一番永く接近しているので、つとめて第三者距離を保ちたいため『先生』という通稱を用いて見たが、板につかなくて、時々はずれる。すべての用語、文字、文体が古くて現代と合わない段(あと)頗(すこぶ)る恐縮する。これまた御勘弁願いたい。私は石井より十八年後生れだが、既に古稀の老齢である。今更年齢の算え方を変更する訳にも参らぬ。（中略）幸に史学専攻の兒嶋君が茶臼原に居るので何呉(なにくれ)と手傳って貰った事で、些(いささ)か要を得たものと自ら安心したい」

日向文庫十三巻は昭和二十七年に刊行され多くの読者を得ましたが、復刊の要望が強くなりました。そこで日向興業銀行が改称した宮崎銀行の創立五十周年を記念して、昭和五十七年に復刊されました。

二十三、政一郎、持病が悪化し、七十八年の生涯を閉じる

政一郎は町長在任中の昭和三十一年二月、体の不調を訴え病床に伏しました。翌三十二年三月の町議会には病を押して答弁に当たりました。その後、県立病院に入院。再起はかなわず、昭和三十七年一月十四日に永眠しました。享年七十八才。惜しまれる死でした。

町葬が営まれ、その後名誉町民に推戴されました。

第三章　柿原政一郎と尾崎一男

一、はじめに

尾崎一男は零細な高鍋信用金庫を全国有数の預金量を誇る信用金庫に育てた名経営者として知られています。高鍋町長・柿原政一郎のもとで高鍋町助役を務めたとき柿原の薫陶を受け、柿原を尊敬するようにな

りました。大正二年生まれの尾崎は石井十次と面識はありませんでしたが、柿原の石井十次に対する尊崇の念に強い影響を受けました。柿原なきあと石井記念友愛社を支え、石井十次の顕彰に尽力しました。

二、尾崎一男、高鍋で家業の公衆浴場を経営、鋸屑を大八車で運ぶ

尾崎一男は昭和六年に旧制高鍋中学を卒業し、法政大学経済学部に入学。招集されて、熊本に駐屯し終戦を迎えました。大阪で就職しましたが妻の体調不良で高鍋に帰り家業の公衆浴場を手伝います。風呂の燃料は鋸屑でした。尾崎は毎朝早く製材所に出かけ、大八車に山盛り鋸屑を積んで帰りました。大学出の若者が麦わら帽子をかぶり地下足袋をはいて大八車を挽く姿は評判になりました。高鍋信用組合長の久保田鶴次は尾崎に、信用組合の専務に来ないかと言いました。「鋸屑を運ぶ者がいない」と断ると、「人を雇え。それくらい給料を出す」といわれました。尾崎ははじめて金融業界に入りました。

三、柿原町長から助役に招請される

昭和二十六年一月、高鍋町長に当選した柿原から、突然助役を引き受けるよう要請されました。柿原は旧制高鍋中学卒業生を助役に据えたいと思い同窓生に人選を頼みました。同窓生が推薦したのが尾崎です。尾崎にとって晴天の霹靂でした。彼は信用組合長の久保田に相談しました。久保田は「断って来る」と言って柿原町長のところに行きましたが、逆に説得されて帰ってきました。「尾崎君、四年間役場に行って来い。四年経ったらまた帰って来い」と言いました。尾崎の人生はこれを機に変わります。三十七才でした。



尾崎一男
すぐれた銀行家・柿原町政の名助役

四、柿原の下で町政を担い、多くを学ぶ

町長になった柿原は給料を受け取りませんでした。「給料をもらうと税金が高くなる」というのが理由でした。町政はすべて助役の尾崎にまかせました。尾崎にとっては慣れない町政でしたが、躊躇することなく自分の判断で進めました。税金問題で議会で質問されると、柿原は「私が最も信頼する尾崎助役がやっているのだから心配ご無用」と答弁しました。尾崎としても奮い立たざるを得ませんでした。

五、黒谷坂（くろだにざか）の難工事で柿原の恩情に救われる

町の消防長を兼務していた尾崎は、消防団員の制服を調達したいと考えていました。団員には制服がありませんでした。団員の士気の高揚のためにも揃いの団服が必要と考えていました。

そのころ町は黒谷坂の道路改修工事を予算化しました。尾崎は工事を高鍋町消防団五百名に請負わせ、その賃金で制服を調達しようと考えました。延べ千人の作業員が必要という見積りでしたが、団員は素人なので四回ずつ出る計画で工事に着手しました。しかし始めると相当な難工事でした。地盤が粘土のため思ったより手間がかかり、予定の期日に完成できません。団員は家業や勤めがあり何日も休めません。そのうえ共産党員が現場に来て「新田原に通じる軍用道路建設反対」のアジ演説をして団員のやる気を削ぎました。尾崎は部長会を招集し協議の結果、工事中止が決まります。ところが警察署長から「共産党が高鍋の消防団を壊滅させたと全国に情報が流れている。消防団の士気にかかわる。工事を続けられないか」と強硬な抗議を受けました。尾崎は「これは大変な事態になった。町民からも批判を受け、議会でも問題化するだろう」と覚悟しました。

町長には相談せず尾崎の一存で進めてきた工事でした。尾崎は早朝に柿原町長をたずね、叱責を覚悟で報告しました。柿原は頷きながら聞いていましたが、思いがけない言葉を口にしました。「それは尾崎君、高鍋の消防団だからそこまで出来たのだ。大変だったね。よくやったね。このままでは団員に気の毒だから残りは専門業者にやらせ、あくまで消防団の手で完成したことにしてやれ。そこまで始末してやれ」と言いました。厳しい叱責を覚悟していた尾崎は、柿原の恩情あふれる言葉に感激しました。尾崎は後に「この人のためなら命はいらない。どんなことがあってもこの人のために働こう。人生の師と仰いで行こう、という気持ちになった」と書き残しています。

六、古巣の信用金庫(信用組合から改組)に戻り理事長になる

昭和三十一年五月、高鍋信用金庫に戻り理事長となりました。当時の高鍋信用金庫は零細で、職員数は理事長を入れて二十二名でした。職員は尾崎を理事長と呼ばず「尾崎さん」と呼びました。預金残高は宮崎信用金庫の二億六千六百万円に対してわずかに八百万円でした。尾崎の言葉によれば「オーバーに言えば全国最低の信用金庫」でした。

一千円単位の融資に汗を流している時、出納係が「〇〇さんが預金五十万円を引出したのでお金がありません」と駆け込んできました。融資の資金は別に用意してあったので、業務に支障はありませんでしたが、この事態に尾崎はショックを受け、一週間くらい重苦しい気持ちになっ

たといいます。

財務基盤の弱いそんな信用金庫に監督官庁の九州財務局（熊本市）は危機感を持ち、局長は尾崎を熊本まで呼び出しました。そして日向興業銀行（現宮崎銀行）との合併を強く奨めました。

尾崎は返事をしませんでしたが、屈辱を感じました。そして逆に闘志を燃やしました。臥薪嘗胆（がしんしょうたん）の日々が始まりました。

七、「経営は教育である」を実行し、若手行員の「心の教育」で人間性を育てる

理事長の尾崎は「金融機関の商品とはなにか」を考えたとき、「顧客の選択基準は、金融機関の信用とセールスマンとしての職員の信用にある」ことに気がつきました。そこで「職員の誠実な人間性を育てること、社会から信頼される職員を育て上げること」を経営上の最重要課題としました。

理事長みずから全支店を廻り、「得意先係との顧客訪問」と「理事長懇談会」を始めました。昼は得意先係のバイクに同乗して得意先を訪問。得意先係に実地の教育指導をしました。夜は懇談会を開いて職員と懇談しました。スルメを肴に焼酎を飲みました。バンカーとしてのあり方や人間としての生き方について議論しました。尾崎にとって「経営は教育」であり「教育とは心の教育」でした。「心の教育」には尾崎自らが当たりました。職員との絆は強くなっていきました。

八、たゆまぬ努力の中、躍進がはじまる

成果は徐々にあらわれました。昭和五十年には過去十年間の預金伸長率が全国信用金庫で第一位、貸出金第二位となり、全国の金融業界から注目されはじめました。昭和五十三年には資金量が五百億円を突破し、同五十九年には資金量が千億円の大台に乗りました。平成五年には資金量が千五百億円となり、県下の信用金庫では他の追随を許さず、九州では第四位となりました。

国内では「北の遠軽（おんがる）、南の高鍋」と称されました。両金庫とも農林漁業を中心とした経済後進地という不利な経済基盤の地域でしたが、著しい業績の伸びを示したのです。

（＊遠軽：北海道紋別郡遠軽町・遠軽信用金庫）

九、石井十次像の建立と顕彰会の設立

昭和五十六年、高鍋信用金庫は創立六十周年を記念して石井十次像を制作し、高鍋町中央公園に建立しました。あわせて西内天行著「信天記」復刻版を刊行しました。

石井十次顕彰会は昭和五十七年に任意団体として発足しました。平成二年四月に正式に高鍋町の予算措置を得て、財団法人石井十次顕彰会が設立されました。尾崎一男は理事長に就任しました。石井十次を顕彰すると同時に、石井十次賞を創設し、全国の児童福祉団体に光を当てました。同五月、尾崎は喜寿を迎えるのを期に信用金庫代表理事会長を退任しました。退任後も友愛社の理事は続けました。講演に呼ばれると「柿原町長のもとで働き、薫陶を受けた話」をしました。

平成十一年十月に名誉町民に推戴されました。平成十八年一月五日逝去。享年九二才でした。



高鍋中央公園にある石井十次像

第四章　柿原政一郎とその家族

一、妻

柿原政一郎は明治四十三年十二月二十七日、高鍋出身の福崎マサと結婚しました。ふたりの間には、長男正明、二男幸二、三男正平、長女てつ、次女みちが誕生しました。しかし、正明と正平は夭折しました。

二、子女・子息

長女てつは明治四十四年（一九一一）十月十八日、湯風呂の本宅で生れました。宮崎県高等女学校、東京女子大学国文科を卒業。竹本孫一と結婚しました。

二女みちは大正二年（一九一三）八月八日、高鍋町小丸の社宅で生まれました。東京女子大学を卒業。長津久男と結婚しました。ふたりの間には長女・俊子、次女・典子、三女・弘子があります。

二男幸二は大正五年（一九一六）十一月九日、岡山市で生まれました。長女てつによると「幸二は子供のときは神童といわれた」といいます。しかし立身出世主義をきらい、芸術や文学を好みましたが、生涯にわたる専門としては自然科学の研究者の道を選びました。

小学六年で東京に移り駕籠町小学校に転校し、昭和八年に東京府立第

五中学に入学。第一高等学校を経て、東京帝国大学理学部化学科に進学。昭和十六年、東大を卒業し、東京芝浦電気株式会社に入社。原子核工学を専門としました。太平洋戦争勃発時で、電波兵器（レーダー）の開発に従事しました。終戦後は、原子力平和利用が叫ばれ、昭和三十年に日本原子力研究所が設立されると建設段階から参加。第一号原子炉の運転管理の責任者に抜擢されました。昭和二十二年五月、中島美代と結婚。

昭和三十二年第一号原子炉が完成すると、「毎日が思いがけない新事実との遭遇で、どんな教科書をみても何も書いていないことの連続で、原理にさかのぼって究明しないと何もわからなかった」といいます。悪戦苦闘の五年間を過ごし、「原子炉のベテラン」の評価を受けます。

このころ昭和天皇の皇太子が原子力研究所を訪れ、幸二が説明役を担いました。テレビでも放映されたのを見た父・政一郎は大喜びしました。

昭和四十六年、五十五歳で定年退職すると、原子力サービスのための会社・東京ニュークリアー・サービス株式会社を設立し社長に就任。従業員二百人を超える技術専門企業に成長させました。後進に道を譲り相談役に就任。

昭和六十年、父・政一郎が設立した高島産業株式会社の社長に就任。同社は、広島市を拠点として、自動車学校、不動産賃貸業、宮崎での緑茶の製造・販売を主な事業としました。幸二は「父の長男というだけで、何の能力もない。何とかこの社長を引き受けているが、こんな不適任はないと思う」と謙遜しています。

科学的才能に恵まれ、草創期の日本原子力分野の中心的存在でした。文化芸術にも興味を持ち、博学多才でしたが、自己の才能を誇らず、謙虚な人柄でした。昭和六十三年一月、脳梗塞を発症して入院。療養生活を送りました。平成八年七月二十八日鎌倉の病院で死去。享年八十才。

あとがき

本年は柿原政一郎が亡くなって六十五年目に当たります。また来年が正幸会設立八十周年になります。

児童福祉の父・石井十次に師事した柿原政一郎は、世の中の不平等を痛感しました。実業家・大原孫三郎の秘書としても働いた政一郎は、搾取することなく利益を社会に還元する資本主義も学びました。

終戦後の混乱した時代に二期にわたり高鍋町長を無給で勤め、財政を立て直す一方で、文化の中心となる図書館を自費と正幸会の寄付により建設し、高鍋町に寄付するという足跡を残しました。

こうして社会正義を生き方の中心に捉えながら、強い郷土愛を持ち、郷土文化の向上にも尽力しました。

柿原政一郎の一生は、社会正義と郷土愛から来る奉仕の生き方を貫い

たものと言えるでしょう。高鍋町に最も貢献した政治家であり社会事業家であるとの評価は間違いないところです。

本稿の内容は「柿原政一郎」（荒川如矢郎著）に拠るところが多く、また政一郎の父・正一については「柿原正一」（竹本哲子著）に拠ったものです。そのほか、公表された資料を参考にしました。資料の著者ならびに関係者の皆さんに感謝の意を表します。

（終）

参考資料

「柿原政一郎」荒川如矢郎著　柿原政一郎翁顕彰会

「柿原正一」竹本哲子著　財団法人正幸会

「夕映え―余白の日々―」竹本哲子著　日本之薔薇出版社

「石井十次」柿原政一郎著　日向文庫刊行会

「柿原幸二日記」柿原幸二著　財団法人正幸会

「郷土に生きる」尾崎一男著　高鍋信用金庫

発行：高鍋町　社会教育課　令和八年八月